幼児における日本舞踊の指導

濱　田　昌　子

【はじめに】

本来，日本舞踊の集団指導は芸術的視野から見る限りにおいて，あり得ないかもしれない。しかし，入門時に「とっつきにくい」というイメージを払拭し，古典舞踊の初期指導をスムーズに運び，また教育機関において舞踊指導を行うには集団指導は不可欠となる。幼児期に舞踊体験を持つことにより，民族意識を高め，西洋式教育では見出せない古典舞踊の意義を考察しつつ，その幼児期の集団指導法を検索している。1992年から４年間にわたり，保育園の４～５才児（約880名）を対象に，舞踊指導を実施した経過報告及び，今後の指導者に対する示唆を提示するものである。

【指導方法】

指導にあたり，１．日本人としての心の伝承（情緒，礼儀）２．体力づくり（持久力，バランス，集中力）３．芸術性の能力開発（リズム，感性），この３つの基本方針をもとに指導基本を設定した。幼児の場合はグループにより能力差があるため，プログラム設定を細かく変化させねばならないが，基本的に「出来る限り邦楽を使用」「静の動きを重視」「動きは左右対称とする」「子供の自発的動きを誘い出す（手拍子，足拍子）」などを指示しながら具体的プランとしてＡ案とＢ案を作成し，実施した。

Ａ案	・着物を着る　・帯を結ぶ　・正座 ・お辞儀　・着物や帯を片付ける
Ｂ案	・足拍子　・手拍子　・小道具（傘，団扇） ・わらべ遊び（とうりゃんせ，はないちもんめ，まりつき，手遊びなど）

Ａ案とＢ案を組み合わせながら，舞台発表へと移行させた。

【結果】

指導者や幼児の父兄の聞き取り調査の結果，まず座位からの足関節，膝関節の屈曲，伸展がスムーズになったことがあげられる。指導開始期の４月は両手をついて立位姿勢を行っていた児童が，脚のみで行うようになるのが７月頃である。またこの頃には一人で浴衣を着ることが出来るようになり，幼児のみで助けあいながら，後片付けに工夫を凝らすようになる。この時期に舞台発表（七夕祭り）などに持ち込むと，一層の発展が見られる。多人数で同じ動きや同じリズムを持つために，スポーツなどの競争意識よりも協調性が培われてくるようである。指導Ａ案のお辞儀や正座は日常にはない『静の時間』として，幼児に思いのほか印象深く，「頭がすーっとして気持いい」とか「お話を始めると園児が自然に正座をして，静かに聞いてくれるようになりました」と日常動作の変化も見られるようになった。小道具を使用するようになると，指先の動きに注意するようになり，動きの細部にわたる観察と繰り返しての練習ができるようになってきた。練習時間の延長が可能になった。３年目には，年代の違う児童を組み合わせると，音楽にあわせて自分達で自由に振付をし大変おもしろい作品が出来た。

【考察】

平素“ゆっくり”ということが少ない現代社会の中で，ゆっくりと動くことに幼児は大変な関心を持っている。耳を澄まして鼓や琴の音色を聞くなどは身体的にも情操教育的にも効果があるだろう。正座は“待つ”態勢でもあり“動く”態勢でもあり，良い意味でのストレスを与えながら，その緊張感が幼児の集中力を高めていくようである。リズム感を高めるという点において，邦楽独特の間合いを身体を持って習得するということが大切であり，またその習得時期がちょうど現在の５歳頃が有効であるということも忘れてはならない。『心に優しい教育』の現場の一つとして，日本文化継承の意義も加えて指導者は古典舞踊の動きをあくまでも簡略にせず，段階をふまえながら正攻法で指導することが重要であるといえる。それが幼児の能力開発につながると同時に，数字では表わせない心の発達に影響を及ぼすことを重視せねばならない。

【提言】

教育現場に日本舞踊が取り入れられない現状をみつめつつ，日本舞踊の集団の指導法の確立の遅れを認めざるを得ない。今後幼児期に舞踊指導を行う為のフォーマットを，体力測定などとからませて作成する必要があるだろう。